日中社会学会ニューズレター

Japan-China　Sociological Society　Newsletter

No.49　2007.3

目　次

第１９回大会に向けて	1	留学雑感	9
２００６年度研究集会関連	1	アジア農村社会学会のお知らせ	11
回族自治区から見る中国社会(1)	8	事務局からのお知らせ	16

■第１９回大会に向けて

過　放（大会担当理事）

日中社会学会第１９回大会は、６月２日（土)、３日（日）の両日、日本福祉大学・名古屋キャンパス（大会実行委員長：陳立行会員）で開催されます。

①「報告要旨」の書式、②自由報告の参加申込、③「報告要旨」の宛先、④お問合せ先を下記にお知らせします。

①「報告要旨」書式

・**Ａ４用紙、４０字×４０行、明朝体で 10.5 ポイント、横書き、２頁とする。**

・氏名、所属、報告題目を明記のこと。

・そのまま複写されることを念頭に作成してください。それ以外の資料には当日配布としますので各自で用意してください。

②「自由報告」の参加申し込みについて

・「自由報告」は、**封書による「報告要旨」の送付をもって申込とします**。

・申込締切は **4 月 20 日（必着）**とします。

③「報告要旨」の宛先

・〒594-1198　大阪府和泉市まなび野１－１
桃山学院大学社会学部　過放研究室

④お問い合わせ先

過放研究室

・電話：0725-54-3131（代）内線 3927

・E-mail: guo927@andrew.ac.jp

なお日本福祉大学の規定により、学会大会開催の最終的な確定は、当該年度の４月１日以降となっております。現在のところ、左記の通りの日程および会場で予定をしておりますが、翌週に開催となる可能性もゼロではありません。

万一変更を余儀なくされた場合には、至急ハガキ等にて変更のご連絡をいたします。

■２００６年度研究集会関連

首藤明和（庶務理事・研究プロジェクト）

2006 年度・日中社会学会・秋季研究集会が、2006 年 12 月 8 日(金)・9 日(土)の２日間にわたり、愛媛大学法文学部（実行委員長：中村則弘会員）にて開催されました。今回は、愛媛大学法文学部・部局長裁量経費研究集会「アジア太平洋地域におけるオルタナティブな発展の可能性に関する学際的研究」との共催で行われました。

研究集会では、中村則弘会長のご尽力によって、気鋭の研究者８名を中国からお招きし、刺激に満ちたご報告をいただきました。２日間、３つのセッションでは、「中国の社会学研究者から見た日本社会」「中国における底辺層と民衆」を共通論題として、延べ 50 名ほどの参加者のもと、活発な議論が交わされました。

会場の手配や設営、また、いろいろと煩雑な作業にお骨折りくださった関係者の方々に、心よりお礼申し上げます。

また、中国からお越しの先生方とともに日中社会学会会員諸氏は、小松正幸愛媛大学長を表敬訪問致しました。小松先生ご自身のチベット訪問の思い出話や研究交流の話題などで、一同、話に花が咲き、楽しいひと時を過ごしました。

12 月 10 日（日）に実施されたエクスカーションでは、「NPO 法人・えひめグローバルネットワーク」の事務所を訪問し、代表の竹内よし子氏からお話をうかがいました。竹内氏は、モザンビークや松山での活動を踏まえつつ、「持続可能な開発」や、そのための教育、社会実践などについてお話下さいました。その後、NPO 組織、NPO を取巻く環境や課題、現代社会の人々の価値観や意識など、さまざまな話題について、参加者のあいだで意見交換が行われました。

続いて、部落解放同盟・松山支部を訪問し、松山市議会議員の松岡芳生氏より、被差別部落の歴史についてご紹介いただきました。人びとが担ってきた文化や信仰、さまざまな芸能、技術などについて概説いただき、さらに、松山における被差別部落の現状や今後の課題について、詳細な実例に基づき、お話いただきました。日本社会や、自身を取り巻く非対称な関係性に対する既存の認識が揺さぶられ、新しい社会の構想と実践が促される、示唆に富むお話をうかがうことができました。

ご多忙にもかかわらず、私たちの訪問を快くお受けくださいました小松先生、竹内氏、松岡氏の皆様に対しまして、重ねて心よりお礼申し上げる次第です。

2006 年度の研究集会は、中村則弘会長（ご家族の皆様も含めて）の格別なご厚意と、愛媛大学の皆様の真心のこもった「おせったい」の恵投に与り、たいへん有意義で、思い出深いものとなりました。

研究集会での議論の内容について、詳細な報告を、当日参加された会員の方よりいただいております。ご投稿、ありがとうございます。以下に掲載し、会員の皆様に紹介申し上げます。

第１日（Session Ⅰ）
「中国の社会学研究者からみた社会」

「日本研究の問題意識」　羅　紅光
（中国社会科学院社会学研究所教授）

司会：首藤明和（兵庫教育大学）

報告：南　誠
（京都大学大学院博士後期課程）

現代とは資本／商品／人などの地球規模の流動化が活発に行われているように、トランスボーダーの時代である。トランスボーダーの時代においては、他者と出会う機会が多くなり、他者ないし他者の文化をどう認識するかといった問題が表出する。その際、「合理化」を理念とする近代の知は依然として支配的である。羅紅光先生は自らの日本での留学体験や現在の研究課題を踏まえ、今日の悪化する中日関係や中国の社会学者が捉える日本社会の問題点について、マックス・ウェーバーの言う「合理化」「理解の社会学」を用いて分析しつつ、現代における近代の知を超克するために、国境を越えての問題の共有化を促進

していく必要性を提唱する。

まず、中日関係の問題について。中国人が日本に対する好感度は 1994 年の 26%から 2002 年の 5.9%へと減る反面、嫌い度は 38.5%から 43.3%へと増加している。このような傾向に対して、多くの中国人研究者は歴史問題がキーワードであると考えている。しかし、問題はそれだけにとどまらない。羅先生は中国人の日本イメージにも問題があると指摘する。中国の民間人にとっての日本イメージは日本人（社会）との直接交流がない環境下で、主にメディアによる報道から形成されたものが多い。しかし、メディアによる報道は一般的に「脅威」「異常」「戦争」などといった非日常的な出来事を捉えがちであり、また、加工された上での報道であるので「客観性」に欠けるといった問題点を抱えている。このように報道されるのはアメリカや台湾問題をめぐる冷戦構造の名残であり、ある種の「合理化」に沿ったものであるといえる。「合理化」を追求する傾向はメディアの報道だけではなく、中国の社会学者が捉える日本社会の問題領域からも垣間見ることができる。

従来の中国の社会学者の日本への関心は、二元構造（例えば冷戦構造）の中での二者択一という問題意識に偏っていた。史学的、政治的、経済的、国際関係の中での日本経済を問題視することがあっても、文化的な視点から日本の経済現象を把握することはなかった。しかし、日本を含む「四つのドラゴン」の高い経済成長率が世界的に注目されるにしたがって、その文化的要素としての儒教精神が脚光を浴びるようになった。また、中国国内では SARS や自然災害等の問題が発生し、それらの問題は医療や自然保護の問題領域を超えて、社会問題として捉えていく必要性が求められた。これに伴い、中国の社会学者が捉える日本社会の問題領域は従来の経済問題から多様化へと変化していく。

現在、中国の社会学者が捉える日本社会の問題の順位は社会福祉研究、経済研究、社会教育とモラル研究、ジェンダー研究、社会構造研究、家族研究、宗教研究、思想研究となっている。しかし、これらの順位およびその問題領域を捉える理由は研究対象から生まれたものではなく、研究者らが抱える問題意識から演繹的に抽出されたものである。例えば、社会福祉研究が一位となった理由は次のようになる。ひとつは市場経済の導入により、中国においては国家対市場という構図が生じ、「社会不在」という状況に陥っていた。「社会不在」から社会を呼び戻すために、社会福祉研究が注目されるようになったのである。また、従来の家族再生産において、親扶養の問題は家庭内福祉だけで解決できていた。しかし、一人っ子政策の影響により従来の家庭内福祉制度が崩壊し、社会福祉の問題として捉えなければならなくなっていた。

中国の社会学者の問題意識を吟味していくと、その目的はマックス・ウェーバーの言う「理解の社会学」にあるというより、その使用価値に力点を置いてあることがわかる。つまり、一方通行的な研究がなされているということである。中日関係においても同様な指摘ができる。中日の間に存在する情報の格差、メディアによる表象の中においては若者の知的な構造が傾けられている。その中から生じる日中関係の問題は歴史の問題であるよりも、政治的な問題だと考えるべきである。

以上の考察を踏まえて、羅先生は今日

の自然科学や社会科学において、「一方的な説明」という方法論が依然として強いと結論する。また、西欧社会を中心に生まれた近代の知および「一方的な説明」という方法論を克服するために、学者も市民と同じように、国境を越えた交流および国境を越えた問題の共有化が必要であると羅先生が提唱する。

羅先生の報告を受けて、会場からはウェーバーの「合理化」、「近代知」のあり方、「主体化」の弊害、他者に対する合理的な理解の可能性、「社会不在」といった理論的な意見から、メディアによるイメージ創造の内実、真の相互理解のための若者の交流、研究の利用価値、他者理解および両者の共存の可能性、草の根の交流の必要性、民間交流のあり方といった実践的な意見まで幅広いコメントが多く出された。今回のような研究集会はまさしく、羅先生の言う国境を越えた問題の共有化に向けた実践の場であったといえよう。

～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～

第２日（Session Ⅱ）
「中国における底辺層と民衆(1)」

・「『社会転型』のなかの中国労働者階級」
戴　建中
（北京市社会科学院社会学研究所）

・「居住空間の特徴から見る都市社会底辺層」
李　国慶
（中国社会科学院都市発展・環境研究センター）

司会：陳　立行(日本福祉大学)

第２日（Session Ⅲ）
「中国における底辺層と民衆(２)」

・「『離村』時代の中国農村家族、二重社会構造の歪み再考」
張　玉林
（南京大学社会学部）

・「転換期における F 市身体障害者のマージナル化」
郁　貝紅
（福州大学文化社会科学院）

・「中国農民の二度の分化と家庭ネットワーク化」
王　頡
（中国社会科学院社会学研究所）

・「チベット族文化の伝統的思考と現代チベットの社会経済発展」
次仁央宗
（西蔵大学文学院・西蔵大学蒙蔵文化比較研究所）

・「中国・青海省西寧市彭家鎮 火東、火西村における村落移動による貧困救済の実例分析」
湯　青川
（青海大学農牧学院農学系）

司会：永野　武(松山大学)

報告：長田洋司
（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科
博士後期課程）

2006 年 12 月 8 日(金)・9 日(土)の二日間にわたり、愛媛大学法文学部大会議室において研究集会が開催され、合わせて三つのセッションに分けて、研究報告が行われた。会場では、特に第二日目において、雨天にも関わらず、報告者・一般参加者合わせて延べ 50 名近くが参加し、活発な雰囲気の中で会が進行された。特筆すべきは、今回の研究集会に当たって、中国各地から 8 名の中国人研究者が来日し、それぞれ非常に興味深い報告をしてくださったことである。今回出された各報告は、日本で発表されるという点においては新鮮なテーマばかりであり、非常に意義深いものであるという印象を受けた。そしてまた、研究集会全体の印象として言えるのは、各報告を通して、中国のその広大な国土と地域的な多様性を再認識させられたという点である。中国国内で今現在展開されている様々な問題が、単なる活字としての報告による平面的なものではなく、現場のデータを用いながら立体的に、実際に頭の中に映像が浮かんできそうなほどに生き生きとした報告ばかりであった。それでは、以下、第二日目の各セッションの様子についてご紹介したい。

Session Ⅱ

戴報告では、改革開放以降の約 30 年において、労働者階級の内部構造が転換し、それに伴って労働者階級の地位や意識も低下している問題について述べられた。そして、実際の統計資料を交えて紹介した上で、階級の固定化により必要な利益の再分配が困難であること、農民の都市への流入が進行していること、資本がグローバル化していること等の問題を解決することが、労働者問題そのものの解決に繋がることを論述した。都市部における労働者階級というのは、ある意味で最も改革開放以降の激しい変化に曝された階級であると言え、そうした労働者階級の現状が戴報告を通して、より詳しく理解できたと感じた。尚、フロアからは、労働過剰の解消はどのようにして可能か、社会制度の優劣がひっくり返されている問題に対して二元論的(マルクス主義とダーウィン主義)解釈でいいのか、といった深く掘り下げた質問が出された。

李報告では、北京市における都市空間構造の生成に影響を与える要素として、伝統的要因、社会主義要因、市場経済要因という三つの要因を挙げ、各要因について北京市内の様々な実例を交えて紹介した。そして、北京の空間的特徴として、社会階層の分化はあるが階層を跨いだ混住が一部で見られ、住民の異質性が高いという点を挙げた。そしてさらに、行政中心主義ではなく、階層を超えて協力できるような生活中心主義的なコミュニティ運営原理を確立させるべきだと提言した。李報告では、北京市の地理的特徴から歴史的な経緯に至るまで、現場の写真を使いながら解説がなされたのだが、単に都市化の理論に当てはめて説明することができない独特な中国都市の様相が明らかにされたように思われる。またフロアからは、混住により利用する小売機関も同じであるのか、そうした雑居性が北京に限られることなのかといった質問が出された。

Session Ⅲ

張報告では、すでに１億人規模にまで増大している農民の流動に関して、農村家族と農民生活の視点から、農村社会の崩壊が進行している状況について統計データを交えて紹介した。そして、現在農村では、出稼ぎのための農民の離村により、離婚、留守っ子、家族の空洞化・独居老人といった家族崩壊の要因が引き起こされており、中国独特の都市と農村という極端な二重社会構造が農村社会の解体を促していると指摘した。さらにその対策として、都市化戦略の見直しを提言した。これまで、中国都市部において、改革開放以降、大量の農民工が流入し、それに伴い様々な問題が引き起こされているといったような、都市部に滞在する農民達に関する研究というのは数多く発表されている。しかし、正に農民工として農民が離村した後における、農村の側から見た様々な問題に関する研究というのはそれほど多くはないように思われる。尚、フロアからは、離村の際に子供を置いていく理由、離村による農業への影響について質問が出された。

郁報告では、中国における弱勢集団(障害者や経済的、政治的、社会的なチャンスを失って社会において不利な地位におかれる人々)、特に身体障害者の問題を取り上げ、2003 年に 2 度実施された訪問調査から導き出された分析結果を紹介した。紹介された分析結果からは、彼らは、現在においても社会における待遇は悪く、政府からも充分な保障を得ていないことが浮き彫りにされた。そして、胡錦涛国家主席が現在、提唱している「和楷社会(調和の取れた社会)」の真の構築のためには、身体障害者の問題を解決し、彼らの生活を大きく改善させる必要があると提言した。この郁報告は、階層分化と階層格差が深刻化している中国おける弱者である弱勢集団、特に身体障害者の待遇問題を取り上げているのだが、紹介された訪問調査の結果から見れば、彼らの置かれている状況が如何に深刻なものであるのかが非常に明らかに示されていた。尚、フロアからは、こうした問題に対して国の政策として地方格差を失くすような一定水準の行政(所得の再分配など)を実施しない理由等についての質問や、日本の民生委員のような下から情報を吸い上げるような制度についての意見が出された。

王報告では、中国の農民が 1979 年の人民公社の廃止及び生産責任請負制への転換と 95－98 年の所有制改革による集体企業から私営企業への転換という二度の転換を経験したことを踏まえ、私営企業主の台頭においても農民工の都市への進出においても、家庭ネットワークが非常に重要となっていることを明らかにした。そして、その家庭ネットワークの重要性の増大に伴う、集団の分化や地位、階層の変化にまで言及した。同報告では、都市でコミュニティを形成して定住するようになった農民工達の団結力の強さが、実際の事例を基に紹介されており、非常に分かりやすいという印象を受けた。フロアからは、農村の第二次転換における所有制改革についての説明や家庭ネットワークのマイナス面について質問が出された。

次仁央宗報告では、様々な文化が混ざり合い、自然に対する観念、仏教的影響が強く、平和、人性、利他性、世俗を離れるといった考え方を持つチベット文化について紹介された。そして、その長所と短所を挙げた上で、そうした伝統的な文化が現在のチベット社会に与える積極的な面と消極的な面について分析を行った。また、そこには矛盾と衝突が存在していること、如何にして新しい文化価値観を構築するかに注目すべきであることが述べられた。チベット民族を始めとした少数民族の考え方や文化については、まだまだ知らない点も多いため、こうした報告を日本で聞くことができたというのは、非常に新鮮な印象であった。また、フロアからは、文化的特徴を紹介する際に、その純粋性を挙げないで、先ず多様な文化であることを挙げていることが印象的である、といった意見が出された。

湯報告では、青海省での村単位で移住することで貧困状態から脱した実例が紹介され、青海省の貧困の現状とそれに対する政府や人々の取り組みについて述べられた。青海省では、厳しい自然条件、人口過多、伝統的観念といった要因が貧困状態を脱け出す上でネックとなっており、今回実例として紹介された西寧市彭家鎮火東、火西村では、村単位で計画的に都市部へ移住し貧困状態を脱したということであった。そしてまた、こうした行動の背景には、政府による先導と保障があり、移住後の新しい生活や農牧業を含めた新しい生計の手段への適応についても紹介された。日本では、個人のレベルで村を離れて都会に移り住むといった話はよく耳にするが、村ごと移動するというのは、中国ならではのスケールを感じさせられた。また同時に、それをサポートする行政側の対応に関しても、日本の状況に当てはめて参考とすべきものがあったように思われた。

最後に、中村則弘(愛媛大学)によりまとめの総括がなされた。そして、今回の各報告が中国の現状を深く切り込んだものであったこと、また、今後どうやって我々の展望を開いていくかにおいて、今回の発表の中から、人々の自立・自尊といった一歩進んだ展望が見られたのではないかという前向きな意見で締め括られた。

■回族自治区から見る中国社会（1）

漢民族は脇役、回民族が主役！

出和暁子
日中社会学会会員（北京在住）

ご周知のように、中国は多民族国家であり、漢民族を筆頭とした 54 の民族が暮らす国である。よって、中国での生活において、「民族」という言葉を意識せざるを得ない出来事に度々出会う。例えば、中国の大学機関などへの提出書類ひとつにしても、必ず「民族」という欄が設けられている。日本人の私は、当該欄に「無」と一文字書くのだが、一方で「これでいいのかな」とふと考えてしまう。時々、中国の学生から「君たち日本人は「大和民族」じゃないの？」と言われると「そうか。一体自分は･･･？」と「民族」という言葉を改めて深く吟味するようになる。また、今夏、北京市郊外の回族自治区の某県を訪れたことも、このことを更に意識するきっかけとなった。写真にあるように、この県の大通り沿いには「漢民酒家（飯店）」という大きな看板を掲げたレストランがある。このような看板は、中国の多くの都市では、恐らくあまり目にすることはないだろう。現地の人たちの話によれば、「漢民のレストランはあの大通りだけは開いていいけれど、他の通りでは開くことができない」と言う。つまり、ここでは食習慣の異なる漢民族レストランの営業許可区域が決められているのだ。あくまでも回族が主役なのであって、漢民族は少数派の脇役にある。

北京市などの大都市では「回民レストラン」、「西蔵レストラン」、「蒙古レストラン」などの独特の風味をもつ民族レストランであることを示した看板が多く見られ、私たちはこれらのレストランで、各民族の料理や文化を享受することができる。そして、これらはごく普通に何の違和感もなく都市の生活空間に溶け込んでいる。レストランの看板に民族を強調するような標示が何もなければ、そのレストラン＝中華料理のレストランということが暗黙の了解だ。これは中国の人口の大半を漢民族が占めることを考えれば、当然と言えば当然だろうが、しかし、もし北京市のような大都市に「漢民酒家（飯店）」というレストランの看板があったらどうだろうか。

正直、私は日本を出て中国で生活するまではほとんど「民族」という言葉についてあまり考えたことがなかった。しかし、以上のように中国での日々の生活の中での民族を意識せざるを得ない出来事との出会いは、絶えず私の好奇心を奮い立たせる。今後も当県に住む人々を中心として様々な角度から中国社会を追っていきたい。今回は冒頭紹介で終わるが、次回は、もう少し踏み込んで、当県に住む回族の若者の結婚式や生活観を

レポートできればと思う。大都市においては、回族とその他の民族との結婚も容認されるようになっているが、ここ回族自治区では伝統的な習慣上、回族同士の結婚しか許されていない。また、当地に住み続ける若者たちの意識においても、自分の結婚相手は回族以外には考えられないという意識が見られる。現在、当県での結婚適齢期は十代後半～二十代前半であるが、この年齢期の回族男性の数が少ないと言う。そのため、若者の間で、女性の男性取り合い現象が見られ、結婚適齢期になると、双方の親同士が相手との家柄などがつりあうかどうかをよく吟味した上で、早々と条件のよい結婚相手をゲットするために紹介しあうと言う。次回レポートする予定の回族の若者カップルたちもその一例だ。

■留学雑感

中国ネット事情

池本　淳一
大阪大学大学院　博士課程
中国社会科学院　客員研究員

大家好！池本です。今年の東北地方は例年にない暖冬で、ここ大連でも比較的暖かい日々（といっても０度以下ですけど）が続いております。こちらで日本語教師を勤め始めてはや半年。放浪、もとい調査の日々もようやく終わり、ようやく落ち着いて研究が出来る…と思ったんですが。日々、授業と研究に追われ、さらに勤務先の新校舎移転やカリキュラム変更のどたばたに巻き込まれ、たぶん人生で一番忙しい日々を過ごしております。修業を決意して山に篭ったら、「じゃ、まず熊倒してきて」と言われたような気分です。それでも雑念を思い浮かべる暇もないせいか、日本にいた時よりも研究は順調で（体力さえ持てば）いい研究環境を与えてもらったな、と感謝する毎日です。

前置きはさておき。今回のお題は中国の大学生のインターネット事情です。日本でも報道されているように、今、大学生のインターネット利用率はほぼ 100%に近く、中国も情報化社会への道を突き進んでいます。しかし、その利用方法や目的は日本とかなり異なっています。

第一にネットは自宅ではなく、ネットカフェで利用するのが普通です。大学生のほとんど（とくに学部生である統招生）は寮住まい、しかも二段ベットの６人部屋や８人部屋がスタンダードですので、当然自室にネットが出来る環境なんかありません。そこでネットカフェに通うこととなるのですが、ネット「カフェ」といっても基本的にサービスはインターネットのみ、飲み食いはペットボトルやカップラーメン、あとなんか微妙に甘いフランクフルトぐらいしかありません。中国語ではネットカフェは「網吧（ワンバー）」と言いますが、この言葉の方が、お酒を飲むのがメインのバーのように、ひたすらネットやっとけ、というここの雰囲気を良くあらわしていると思います。

一般的なネットカフェの相場は一時間２元で、ほとんどは民家を改造しただけのところが多く、部屋の中にズラーとパソコンが並べられています。その各機体に中国の若者がはりついているわけで、印象としては締め切り前のプログラマーのオフィスといったところです。ペットボトルとカップラーメンをモニターの横においているところも似てます。

また一時間３元の使用料のところでは、たいていビルのフロアをどーんと占領し、ズラーっとパソコンを配置し、証明を落とした中でブラックライトをつけてみたり、カップルシートを作ってみたり、また天井やら壁やらに、銀紙？やミラーボール、そして変なツタを絡ませてみたりしています。近未来感を溢れさせたい意気込みはわかるんですが、確実に違うモノが溢れています。

こんなネットカフェで若者、特にその利用者の八割方を占めている男子学生がはまっているのが、いわゆるネットゲームです。こちらでは今、「魔獣世界」というファンタジー物のオンラインＲＰＧがはやっており、朝から晩までネットに入り浸っている若者も多いと言います。ちなみにその手のオンラインゲームでは、プレイと同時に他のプレイヤーとチャットが出来るんですが、そこには独特の専門用語がたくさんあるそうで、たとえばいいプレイを見せたときには「GG（諸説ありますが Good Game 又は Great Game の略だそうです)」、別れのあいさつは「ＢＢ（Bye Bye)」または「886（Bye Bye 了)」などがあるそうです。ネットカフェにいくと、半分以上の機体でこのゲームをやっている光景が見られます。また名前はわかりませんが、用兵になって戦うゲームや、トランプや音楽ゲームなどのミニゲームっぽいものをやっている人が四分の一ぐらいいます。

このような、オンラインゲームが流行している背景には、ゲーム機体がかなり高価であるという事情がまず指摘できるでしょう。中国でもプレイステーションやニンテンドーの機体は人気が有りますが、それらは（正規版では）ほぼ日本と同じ価格であり、かなり高額であるために、彼ら学生の手には届かないものとなっています。

また以前、ある中国の友人になんで機体ゲームではなくオンラインゲームばかりやるのか尋ねたところ、「ていうか、なんで日本人は一人でゲームやってるの？」と逆に聞き返されました。彼らにとっては、一人でこそこそとプレイするよりも、ネットカフェで友人たちといっしょにおしゃべり（田舎のネットカフェにいくと、たいてい高校生ぐらいの男子生徒が大声で他のプレイヤーに連係プレイの指示を出しています。ものすごい迷惑ですが）しながらプレイするほうが楽しいのでしょう。言われてみれば、テレビに向って一人でゲームをしているのは、かなり寂しい光景なのかもしれませんね。

またゲームをしない若者たちは、たいていＱＱ（中国最大のチャットルーム）やメール、そして機体に保存されている映画を見ています。他方、Yahoo!やグーグルで調べ者をしたりブログを見たりといった人はほとんど見かけられません。また、日本語学科の学生たちも、日本語を調べたりする以外には、ほとんど検索エンジンを使っていないようです。

このようにネットカフェを見る限り、中国ではネット＝娯楽といった使われ方が大半であり、情報の収集や発信のためのツールといった使われ方はほとんど浸透していないという印象を受けます。つまりネットカフェは、中国では（どちらかと言うと、不良の溜まり場といったイメージがあったころの）「ゲームセンター」や「映画館」として位置づけられているのです。この点をしっかりと認識しておかないと、中国におけるネットの普及という事実から、情報化された若者像や、さまざまな（そしてしばしば「有問題」な）ブログの影響を受ける若者像、といった早合点した結論を導いてしまうのではないかと思います。それでは、今日はこのへんで。

■アジア農村社会学会のお知らせ

首藤明和（庶務理事・研究プロジェクト担当）

前号のニューズレター（48 号）でもお知らせしましたように、2007 年８月８日～10 日にかけて、第３回アジア農村社会学会（ARSA）会議が、北京の中国社会科学院にて開催されます。

中国社会科学院と日中社会学会とは、長年にわたって交流を深めてまいりました。同・社会学研究所は、正式発足まで間近に迫った「中日社会学会」の拠点のひとつでもあります。日中社会学会といたしましても、今夏 ARSA 会議のご盛会を祈念申し上げております。

このたび、日本村落研究学会・国際交流委員会の黒柳晴夫氏より、アジア農村社会学会会議のご案内をいただきましたので、会員の皆様にお知らせします。

参加ご希望の方は、下記「案内」をご覧の上、黒柳晴夫氏（連絡先は「案内」文末に掲載）までご連絡ください。また、ご質問やご要望などについて、首藤も承りますので、下記のメールアドレスまでご連絡ください（musicoolcn@hotmail.co.jp）。

～☆～☆～☆～　　～☆～☆～☆～

2007 年第 3 回 ARSA 会議の中国開催についてのご案内

中国側開催機関の中国社会科学院都市発展・環境研究センターによって 11 月 24 日に第 3 回 ARSA 国際会議のホームページ（http://www.ARSA2007China.com ）が開設されましたので、多くの会員がご参加下さるようお知らせかたがたご案内いたします。

第 3 回 ARSA 会議の詳しい内容は上記ホームページをご覧いただきたいと思いますが、開催時期は航空運賃が最も高く、航空利用客も多い時期に当たりますので、座席の確保と運賃交渉のために、有志によっての団体旅行も計画しています。参加あるいは発表をご検討中の方は、黒柳まで、なるべく早くご連絡下さるようお願いいたします。

2007 年第 3 回 ARSA 会議の開催地、日程、申し込み等の概要は以下のとおりです。

１．メインテーマ　　Globalization, Competitiveness and Human Insecurity in Rural Asia

２．期日　　2007 年 8 月 8 日（水）～10 日（金）

３．開催地・場所　北京、中国社会科学院(CASS)

４．開催機関　　中国社会科学院都市発展・環境研究センターおよび同院国際交流局
　　共催機関　　中国社会科学院社会学研究所、中国農村社会学会、
　　アジア農村社会学会(ARSA)

５．日程

8月7日(火)	受付
	午前：Opening Ceremony and Keynote Speech
8月8日(水)	午後：Panel Sessions
	夕方：Welcome Reception
8月9日(木)	Tour to a village
8月10日(金)	午前：Opening Ceremony and Keynote Speech
	午後：Panel Sessions
	夕方：Farewell Party and Closing Ceremony
8月11日(土)	観光ツアー(自由参加)

６．パネルセッションテーマ

(1) International and regional trade agreements and the rural poor : the specificity of Asian Perspective?
(2) Sub-regional integration and development cooperation: The Greater Mekong Sub-region (GMS) and other organizing principles;
(3) Asian regional organizations and international agencies: Policies, approaches and the rural poor;
(4) Intellectual property, farmers' rights and global agreements such as TRIPS: Threat or protection for traditional knowledge?
(5) New risks and vulnerabilities after the 1997 Asian crisis;
(6) The “sufficiency economy” and other alternative development paradigms, community empowerment or education strategies and rural social movements;
(7) Sustainable livelihoods concepts/practices: Local economies and village enterprises;
(8) Environmental threats and food security challenges;
(9) Energy supply and rural environment administration;
(10) Comparisons on rural transformation under high growth economies : Taking Japan , China , Korea and Thailand as examples;
(11) New Village Movement in Korean and China 's New Village Construction;
(12) Village administration and financial organizations;
(13) Development challenges and insecurities in Asian rural conflict settings;
(14) Urban-wards migration, rural uprooting and the new challenge of citizenship ;
(15) Urban-rural disparities and the regeneration of rural livelihoods ;
(16) Urban-rural relations and food security/safety;
(17) Gender and rural livelihood: Women's role in rural development;
(18) Water equity and socioeconomic development issues; and
(19) Globalization and rural transformations: Similarity and diversity of Asian culture(s)

７．参加申し込み　　参加申込用紙に記入して専用メール arsa2007@163.com 宛に送る。

８．参加登録費（昼食費、パーティー費、農村ツアー費を含む）

日本からの参加者の場合

一般参加者 200 ドル

学生参加者 100 ドル

９．発表申し込み締め切り日　　2007 年 3 月 31 日

10. 発表要旨締め切り　　2007 年 5 月 10 日

11. プログラム・チェア　　李国慶 教授

12. 寄付金払い込み口座の開設

ARSA の会議開催にあたって日本の関係者に寄付をお願いするため、中国社会科学院都市発展・環境研究センターが中国工商銀行北京站支行(INDUSTRIAL AND COMMERCIAL BANK OF CHINA BEIJINGZHAN SUB-BRANCH)に下記の銀行口座を開設したので、多くの方からの寄付をお願いします。また、知人や関係者の方々へ寄付の呼びかけをお願いします。振込方法については下記の 13 を参照して下さい。

A/C holder's name:

ZHONGGUOSHEHUIKEXUEYUAN

CHENGSHIFAZHANYUHUANJINGYANJIUZHONGXIN

(上記の口座名は、中国語の「中国社会科学院城市発展与環境研究中心」のアルファベット表記)

A/C No.:　0200064719014427207

SWIFT Code:　ICBKCNBJ XXX

13. 上記寄付金の振込方法

日本村落研究学会・国際交流委員会は、多くの方に寄付をお願いするにあたって、振り込みの便宜を計るために、国内に郵便貯金口座を開設しました。そこに一端振り込んでいただいた寄付金を、日本村落研究学会・国際交流委員会が責任をもって中国側の指定した銀行にまとめて送金するとともに、大会開催機関の中国社会科学院都市発展・環境研究センターに寄付者の名前と金額を伝えるようにいたします。

もちろん、中国の指定銀行に直接振り込む方法もあります。

しかし、銀行や郵便局からの国際送金は、金額の多少にかかわらず、手数料がかかります。また英文記入が必須という煩雑さもあります。さらに、この活動は学会の活動そのものではなく、ボランテイア活動であるため、日本村落研究学会（村研）とは別に口座を設け、村研の非会員にも広く呼び掛けることにしたいと思いました。そこで、中国側と高橋明善会員が相談して、高橋 明善名義の郵便口座を作り、そこにも送金して頂く方をとることにしました。ある程度の金額がまとまってから送れば、金額の多少にかかわらず、手数料は同じですから、安くすみます。村落研究学会と関係のない人は、こちらに直接お送り頂く方が便利かもしれません。

振り込みがあれば、ただちに中国に連絡し、お礼状あるいは、領収書をだして頂くことになっています。確実に中国に受け入れられたことの証拠になります。

したがって、寄付金の振り込み方法には、①国際交流委員会が用意した郵便貯金口座に振り込む方法と、②③中国の指定された銀行に直接振り込む方法とがあります。
いずれかの方法を利用して多くの会員が寄付して下さるようにお願いします。

①日本村落研究学会・国際交流委員会が用意した郵便貯金口座に振り込む方法

下記の郵便口座に振り込んでいただき、併せて振り込み者名（あるいは組織名）、郵便番号、住所、電話・ファックス番号、そして振り込み金額を下記のメールか、ファックスに忘れずに連絡して下さい。

郵便貯金口座　　記号：16140
番号：7101311
名前：中道仁美
メールの場合：　HitomiNAKAMICHI@agr.ehime-u.ac.jp
ファックスの場合：089-946-9837 または 089-946-9830

②高橋 明善会員を通じて振り込む方法

郵便局窓口で、「高橋 明善」名義の「郵便貯金総合通帳」に現金でお振り込み頂くのが一番便利です。

郵便貯金口座　　記号：10080
番号：95941381
名前：タカハシアキヨシ
住所：〒193-0833　八王子市めじろ台１－21－14

③中国の指定された銀行に直接振り込む方法

個人で直接中国に寄付したいと思う方のために、振り込み口座が準備されています。
難点は手数料が高いことです。郵便局の方が安いので、郵便局で「国際送金請求書兼告知書」をもらって必要事項を記入して送金してください送金は円建てで結構です。振り込んだ円はその日の為替レートで元になって受取人の口座に入ります。

1. 「お申込人」欄には会員ご自身あるいは組織のお名前を記入してください。また「送金人名」をアルファベットで書く欄もあります。
2. 「受取人名」欄には「ZHONGGUOSHEHUIKEXUEYUAN CHENGSHIFAZHANYUHUANJINGYANJIUZHONGXIN」,「中国社会科学院 城市発展与環境研究中心」とお書き下さい。
3. 「受取人口座番号」欄には「0200064719014427207」とお書き下さい。

4.「受取人住所」欄には「5,Jianguomennei Dajie, Beijing, 100732, China」 ,「100732 中国、北京市建国門内大街 5 号」とお書き下さい。
5.「支払銀行名」欄には「INDUSTRIAL AND COMMERCIAL BANK OF CHINA」,「中国工商銀行」とお書き下さい。
6.「支店名」欄には「BEIJINGZHAN SUB-BRANCH」,「北京站支行」とお書き下さい。

その他の必要事項につきましては、郵便局窓口でお尋ね下さい。

以上

(問い合わせ先)　黒柳晴夫 (椙山女学園大学文化情報学部)
464-8662 名古屋市千種区星が丘元町 17-3
Tel:052-781-1186(代)　Fax:052-783-2862
hkuro@sugiyama-u.ac.jp

■事務局からのお知らせ

○役員選挙投票のお願い

現在の役員（会長・理事・監査）の任期は、今年６月の第 19 回大会までとなっております。次期役員を選出するための選挙を実施いたします。下記の要領で、投票をお願いいたします。

1. 同封の有権者名簿をご確認ください。
2. 同封の投票用紙にて、理事５名以内、監査２名以内のお名前をご記入ください。
3. 投票用紙郵送用封筒にて、事務局宛に、4 月 6 日（金）までに投函してください。

事務局でとりまとめ、未開封の状態で選挙管理委員会に送ります。

参考

日中社会学会会則（抜粋）

第８条　会長・理事・監査は総会の承認を得て就任し、その**任期は３年**とする。再任を妨げない。但し**連続２期を越えることはできない**。

日中社会学会役員選出規程（抜粋）

第２条

２　**理事のうち１０名は、直接選挙**で選出し、５名は、地域間、専門間、世代間等の関係を考慮し、直接選挙によって選出されたものの協議によって推挙する。

第３条　会長は、新理事会において推挙する。

第４条　**監査は、理事と同時に直接選挙**により選出する。ただし理事に選出されたものは監査になることはできない。

第５条　一般会員および学生会員は、選挙権と被選挙権をもつ。

第７条　選挙の資格を有するものは、**前年度の会費を納入**したものとする。

第９条　選挙は、所定の投票用紙を用いて、直接郵送による秘密投票によりおこなう。**理事選挙は５名不完全連記、監査の選挙は２名不完全連記と**する。

２　有権者名簿は、投票用紙と同封して郵送する。

日中社会学会ニューズレター No. 49

発　　行：日中社会学会事務局
〒790-8578
松山大学人文学部永野武研究室
e-mail:nagano@cc.matsuyama-u.ac.jp
tel:089-926-7451（研究室直通）
fax:089-922-5415（大学事務室）

日中社会学会・郵便口座
口座記号番号：00140－9－161801
加入者名：日中社会学会
日中社会学会・公式 HP
http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Labo/5938/index.html

◎編集担当
首藤明和(musicoolcn@hotmail.co.jp)

発行日：2007 年 3 月